
World × World

シクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World × World

【ZPDF】

Z0506BA

【作者名】

シクル

【あらすじ】

シクル四周年&なろう投稿十五作記念！

主人公、坂崎永久は消えた双子の妹、刹那と「コア」と呼ばれる存在の欠片を捜すためにいくつもの別の世界を旅することになる…。

「夢は現となりて～」、「美味なる純血」、「落ちていた魔導書。」、「ぐらとぐら」、「靈滅師」、「超会！」、「The Legend Of Red Stone」、「Floral Hearts」忘却のローズマリー、「七式探偵七重家綱」……。

これまでのシクル作品の世界を、坂崎永久が巡っていく……！
これらの作品を未読でもほぼ問題ないようになります、とい
うか作ります。

Word-o「プロローグ」(前書き)

どうも、久しぶりの新作となりましたシクルです。

今作「Word × Word」はあらすじに書いてある通り、「これまで記念作品でござります。勿論あらすじに書いてある通り、これまでのシクル作品を知らないても問題ないようになります、なんでプログラマの戻るボタンはまだ押さないでどうかっ！」

TLORS（この間完結した拙作）程ではないかも知れませんが、それなりに長めのを想定して書いてますので、完結は年内にならない可能性も……？

とまれ、これから永久達をよろしくお願ひいたします m(—)

m

Word - 「プロローグ」

枯れた大地だった。

草木の一本も生えていないその地面は、枯れ果ててひび割れてい
る。ただただ荒野のみが広がるその場所に、生き物の姿は見受けら
れなかつた。

ただ、二つの人影を除いて。

片方は、逆立つた黒髪をもつた長身の男だつた。髪と同じくらい
に黒い鎧を纏つており、その黒ずくめの姿の中で、彼の赤い双眸は
映えている。

黒い鎧の男の数メートル先の正面には、丈の長い白いドレスを身
に纏つた少女がいた。ゴテゴテとした動きにくそうなドレスではな
く、装飾の少ない比較的動きやすそうなドレスで、ナイトドレスに
近い。白いドレスとは対照的に少女の髪は黒く、その長さは剥き出
しになつている背中を覆う程だつた。

二人の間には、延々と沈黙が流れ続けていた。

両者口は開かず、ただ静かに互いを睨む。

一秒、二秒、三秒……静かに時が過ぎていく中、不意に男が一步
踏み出した

瞬間、少女の目の色が変わる。

男が少女へ向かつて駆け出すのと、少女が男の方へ駆けるのはほ
ぼ同時だつた。

そして次の瞬間、枯れた大地へ金属音が染み込んでいく。

男の右腕は、どういうわけか剣のような形状へ変化しており、少
女の右手にはいつの間にかショートソードが握られていた。

男と少女は、右腕と剣でしばらく戦いをするが、やがて少
女の方がバックステップで男から距離を取る。

と、その瞬間男は右腕を後ろへ振ると同時にその形状を変化させ
た。

「つ！」

男の右腕は、モーニングスターと呼ばれる武器へと形状を変えていた。

モーニングスターへと変化した右腕の先からは鎖が伸びており、その先には当然、凶悪な棘の付いた……男の頭一つ分程の大きさの鉄球が付いている。

男はその鉄球を少女へぶつけんとして、腰の回転と共に腕を容赦なく少女へと振った。

少女はすぐにショートソードに身を隠して鉄球を防ごうとするが、ショートソードのサイズでは明らかに鉄球を受け切れない。

しかし、ニヤリと男が笑みを浮かべた瞬間に、少女の持っているショートソードは身の丈程もある大剣へと姿を変えていた。

叩きつけられた鉄球は、大剣によつて弾かれ、耳を劈くような金属音を上げながらボトリと地面へ落下する。

「…………！」

鉄球の衝撃による痺れに耐えつつ、少女は両手で大剣を持ち上げ、攻めに転じんとして男へと駆け出す。

両手で持つている大剣を千切るような動作で少女が両手を広げると、少女の手から大剣は消え、その代わりに少女の両手にはショートソードのような形状をした短い剣が一本ずつ握られていた。

「 チイツ 」

男が舌打ちすると同時に、男の右腕は最初に変化したのと同じ、剣のような形状へと戻る。

そんな男に対して、少女は異常なまでに俊敏な動きで一本の剣を操り、間髪入れずに様々な方向から男へと切り込むが、男はそれを右腕一本で受け続ける。しかし、防戦一方であることに変わりはなく、男の表情にはやや焦りの色が現れていた。

不意に、男は空いていた左手の平を、少女へと向ける。

少女がそれに気が付き、しまったと言わんばかりに表情を歪めた時には既に遅く、少女の身体は後方へと吹き飛ばされていた。

男の左手からは衝撃波のようなものが発せられたらしく、少女の

腹部には激痛が走っていた。

地面へ背中から叩きつけられ、呻き声を上げながらも少女は素早く立ち上がったが、少女が視線を男へ戻した時、男は少女へと左手をかざしていた。

来る、と少女が判断すると同時に、男の左手から火球が発射される。

男の頭の倍程の大きさはあるその火球は、真っ直ぐに少女の元へと飛来していく。その火球に対して、少女は避けようとするどころか一步踏み込み　　右の剣を大きく火球へと振った。

次の瞬間には、火球が姿を消していた。

先程まで少女の左手に握られていた剣は消えており、その代わりに少女の右手には先程のショーテル型の剣ではなく、フランベルジエのような剣が握られていた。

便宜上、フランベルジエのよう、と形容せざるを得ないが、その形は通常のフランベルジエとは大きく異なつており、まるで燃え盛る炎のような形をした剣だつた。

恨めしそうに少女の持つ剣を睨む男目掛けて、少女は再び駆け出す。

少女が男へと駆けていく途中で、少女の握っていた剣はまたしてもその形状を変化させていく。

次に少女が握っていたのは、東洋の剣

刀だつた。

素早く斬りかかる少女の刀を、男は咄嗟に右腕の剣で防ぐが

「　ツツ！」

その剣は、刀によつて両断される。

驚愕に表情を歪めつつ、左腕を剣状に変化させて少女へと突き出しが、既にそこに少女はいなかつた。

男はしばらく、焦燥感に満ち満ちた様子で辺りを見回していたが、すぐに上空を見上げ　　言葉を失つた。

その姿は、まるで天使だつた。

ドレスから剥き出しになつた背から、白く美しい両翼の生えたそ
の少女の姿は、天使だとか、女神だとか言つた表現がよく似合つて
いる。

少女の右手にはショートソードが握られており、その切つ先を男
へと向けて少女は急降下を始めていた。

男はすぐにそれを防ごうとするが、男が何か動作するよりも、少
女のショートソードが男へ突き刺さる方が遙かに早かつた。

ザクリと。音を立てて剣が突き刺さつた。

Word - 1 「永久と刹那」

「好きです！付き合って下さい！」

とある高校の屋上で、学ランをきた男子生徒がほぼ九十度なんじやないかと思える程に綺麗な角度でお辞儀をしていた。

そんな男子生徒の前では、一人の女子生徒が立つており、一人はキヨトンとした表情を、もう一人は険しい表情を見せていた。驚くことに並んでいる二人の女子生徒は、まるでドッペルゲンガーカ何かのようにソックリなのだ。

背中を覆う程の長く艶やかな黒髪も、やや釣り上がった目も、背丈も、頭につけている白いカチューシャまでもが同じであり、女子制服であるやや古臭く感じる紺のセーラー服の、長い（膝下十センチくらいに見える）スカート丈まで全く同じだつた。

キヨトンとした表情をしている方は柔和そうな雰囲気だが、もう一人の険しい表情をした方はやや性格がキツめに見えなくもない。

「お願いします！僕と付き合つて

男子生徒が言い終わらない内に、キツめに見える方の女子生徒が口を開く。

「……どっちと？」

冷えた声音でそう問うた女子生徒に、男子生徒は思わずえつ、と困惑の声を上げている。

「私とこの子、どっちと付き合いたいのかつて聞いてるの」

睨んでいるような視線を男子生徒に送るキツめな方の女子生徒の隣で、柔和そうな方の女子生徒は苦笑いしつつ様子を見守っていた。「じゃあ、どっちがどっちなのか貴方にわかれれば、貴方の好きな方と付き合つても良いわ」

そう提案し、キツめな方は、制限時間は十秒ね、と言葉を付け足すやいなやカウントを始める。

「十、九、八、七、六、五……」

「え、あの、えつと……」

二人を交互に指差しながら、惑う男子生徒を見ながら、嗜虐的な笑みを浮かべるキツめな方。その様子を、柔軟な方は先程と同じく苦笑いを浮かべたまま見守っていた。

「四、三、二、一……」

「わ、わかりません……」

カウントが終わると同時に、意氣消沈、といった様子でうなだれる男子生徒に、キツめな方は吐きかけるように小さく嘆息する。

「そう。じゃあ、さよなら」

そう言ってひらひらと手を振ると、キツめな方は男子生徒の方へ目もくれず、そのまま場を去つて行く。その後ろを、柔軟な方は男子生徒に「ごめんね」と小さく声をかけた後で慌ててついて行つた。

「ちょっと……かわいそうじゃない？」

屋上を出、下の階への階段を降りていく途中、柔軟な方がキツめな方へそう言つと、キツめな方は別に、と短く答えた。

「ほら、折角勇気出して告白してくるんだし、あんなことしなくとも……ね？」

控えめに言つ柔軟な方へ、キツめな方は呆れ氣味に溜め息を吐いた。

「ホントにお人好しね……とわ永久」

永久、と呼ばれた柔軟な方の女子生徒はキツめな方の言葉に、刹那せ那つなもね、と小さく笑みを浮かべて答えた。

「ちゃんとどっちがどっちなのかわかつて付き合つて欲しいっていうのは、私のことを考えてのことだよね？ ほら、刹那だつてお人好しー」

茶化した様子でそんなことを言つ永久に、刹那、と呼ばれたキツめな方の女子生徒は途端に頬を赤らめる。

「ち、違うわよっ……私は単に、どっちがどっちのかもわかんな

「いま告白しちゃうような軽薄な男の相手を……する気がなかつただけよ」

「トイとすねたように永久から視線を外す刹那に、永久はへらへらとした笑顔を浮かべた。

坂崎永久と坂崎刹那は、瓜二つな双子だった。

この学校で一年の坂崎姉妹と言えば間違ひなくこの二人のことでのこの気持ち悪いくらいにそつくりな双子は数ヶ月前に転向してきた生徒で、異常に仲が良いことや、一人共いわゆる「美少女」であることからか瞬く間に学校中で話題になつた。

その容姿故、先程の男子生徒のように告白をしにいく生徒が後を絶たないが、大抵は刹那によつて玉砕されている。

ちなみに姉が永久で妹が刹那だが、未だに完全に見分けることが出来た者はいない。

「ただいまー」

学校を終え、自宅である坂崎神社へ戻り、社務所の玄関の扉を永久が開けると、すぐに奥から「どっちだ?」と初老の男性のものと思しき声が返つてくる。

「永久でーす」

履いていたローファーを脱ぎつつ永久がそう答えると、奥の方から着流し姿の初老の男性が顔を出した。

「もう……いい加減覚えてよー」

冗談めかした風に言う永久に、男はすまんすまん、と後ろ頭をボリボリとかきながら頭を下げる。

彼の名は坂崎十郎で、この坂崎神社の神主の弟である。ちなみに神主は十郎の兄である坂崎孝明で、坂崎姉妹は「養子」ということになっている。

「しかしながら同じ顔、同じ声、同じ髪型の人間の見分けがつくか

……？ 髮型くらい変えたらどうだ？

十郎の言葉に、永久はしばらく考えるような表情を見せ、自分の長い黒髪を指先でつづいたが、やがてどうでも良さそうに考えとくと答えた。

「ん、そういうえば刹那はどうした？ 一緒にじゃないのか？」

「あ、そういうえばどこ行ったんだろ……？ 途中まで一緒だったんだけどどうか行っちゃったから、先に帰っちゃったんだと思つてた

……」

「何故見失う

「さー？」

首を傾げておどける永久に、十郎はやや呆れ氣味に嘆息した。

「ボーッと考え事してたら……ね？」

「ね、じゃないね、じゃ

「じびりついた違和感が、拭えない。

まるでカビのように胸の内にじびりついた違和感が、ひっかけてもひっかけても剥がれない。気持ち悪い。

記憶がない。この神社に住むようになつてから記憶の一切が存在しない。

気が付けばここについて、いつの間にかここに住むようになつていて、平凡な女子高生の一人として高校に通つていて……。

おかしい。

坂崎刹那という名前すら、本当に自分の名前なのか確信が持てない。

おかしい。

スッポリと抜けている記憶が何なのか、まるでわからない。

おかしい。

違和感が気持ち悪くて仕方がない。

同じ境遇なのに、そんなことは毛ほど気にしていないかのよう
に振る舞う姉の永久（永久が姉、ということになつてているが実際は
よくわからない）は更に気持ちが悪い。何故違和感を覚えないのか、
仮に永久の中にも同じものがあるとしても、何故あんなにへらへら
としているのか。

刹那には、理解出来なかつた。

「…………」

下校中、社務所へ一緒に向かう永久がボンヤリとしていたのでそ
っと離れて本殿の方へ向かつてみたところ、永久はボーッとしたま
ま気づかずソラノカツニ社務所へそのまま向かつて行つた。そんな間の抜けた
永久の様子に呆れながらも、刹那は本殿の方へと向かつた。
別段、本殿に用があつたわけではない。

ただ、少し一人になりたかつただけだつた。

あまり人気のない神社の中を、あまり意味もなくうろついてゐる。
見慣れた景色ではあるが、やはり昔からココにいたようには感じな
い。

刹那や永久の記憶について、孝明や十郎は何も言わないし、永久
も聞こうとはしていない。刹那は何度か聞いてみたことがあつたの
だが、上手いことはぐらかされて結局詳しいことは何も聞けずじま
いだつた。

「…………帰ろ」

本殿の裏辺りまできたところで、刹那が社務所に帰ろうとした時
だつた。

「アレは…………？」

本殿の裏に、見たことのない祠を見つけた。

「こんな所に…………どうして？」

祠は開け放たれており、周囲の状況から察するにこの辺りにはし
ばらく誰も近づいていない様子だつた。

そつと、何気なく祠に触れる。

「…………つ！」

電流が、刹那の中を流れた気がした。

「ん……んう……んあつー？」

変な声を上げつつ永久が勢いよく身体を起こすと、既に口は落ちていた。

「え、えっと……」

学校から帰り、しばらくいなくなっていた刹那が帰ってきてからのことを反芻し、自分がいつの間にか眠りこけていたことに気が付く。髪に覆われている耳にはイヤホンがついており、その先に繋がっている小型の音楽プレイヤーは、プレイリストを再生し終わっているらし、自動的に電源が切れていた。

「あちやー……」

電気もついていない自室の中、永久は制服姿のまま机に突っ伏して眠っていたようだつた。

「誰か起こしてくれても良いのになあ……」

そんなことをぼやきつつ、イヤホンを外してプレイヤーごとポケットに突っ込むと、永久はゆっくりと立ち上がる。

どうにも、家の中の様子が変だ。

誰も起こしてくれないことにしたつてそうだし、何故か家の中から人の気配を感じない。

不可解に感じつつ、家中を回つてみたが、十郎はあるか刹那もいない。それに、家の中の電気は全て消えていた。

「おつかしいなあ……」

一人呟く。

どこかに出かけている、というのもあまり考えられない。出かけるなら出かけるで、メールや書き置きの一つでもしてくれるハズだ。永久が今回のように家に帰つてからうたた寝してしまったのは、別に珍しいことじやない。永久が寝ている間に全員が家を留守にするようなことがあれば必ず書き置きやメールが残されていた。

誰もいない上に電気がついていないせいか、酷く心細い。

玄関を確認すると、刹那の靴がなかつた。

もしかすると、他の皆は出かけていて、刹那は暇つぶしに外をうろついているのかも知れない。そう考へると、先程から募つていた不安が少しだけ晴れた気がした。

玄関から出ても、特に誰も見つからなかつた。社務所付近には誰もいないようなので、永久はすぐに本殿へと向かつた。

「…………つ！」

本殿に入った途端、形容し難い異様な感覚を覚えた。感じたことがないハズなのに、どこか懐かしい感覚。気持ちが悪い。

素直にそう思つたハズなのに、妙な懐かしさのせいか、少しだけその感覚に浸りたいと想えてしまう。それが余計に気持ち悪かつた。ズシリと胸の中で垂れ下がる違和感。ずっと押し込めていたものが、急に垂れ下がつてくる。

「う…………つ」

気分の悪さが頭痛を伴い始めた。

見える世界が、どこか歪んでいるように見えるのは、この原因不明の気持ち悪さのせいなのか、それとも本当に歪んでいるのか……永久には、判断出来ない。

ただ、景色が所々陽炎のように歪んで見えているのだけは確かだつた。

「何…………」

思わず永久が呟いたのと、本殿の方で物音がしたのはほとんど同時だつた。

「誰か、いるの……？」

問いかけるが、答えはない。

気分の悪さと歪む視界もあいまつて、永久はしばらく本殿の裏へ行くことを躊躇していたが、やがて意を決したように本殿の裏へと走つて行く。

「誰？」

角を曲がつた瞬間、ピチャリと永久の頬に赤が飛び散つた。

「あら、永久……」

恍惚とした表情でこちらを振り返つたのは、自分と全く同じ顔だつた。

「刹……那……」

茫然と佇む永久に、刹那は幸福そうな笑みを浮かべて見せる。その手にはどういうわけか西洋風の剣が握られており、永久が前にプレイしたゲームで「ショートソード」と名前がつけられていたものとよく似ていた。

「見て、これ……」

永久の方へ身体を向け、刹那はゆっくりと両手を広げた。

その足元では、四、五人程の人間が倒れていた。

まだ殺されたばかりなのか、生暖かそうな血をだらだらと流しながら、一目で即死だと判断出来るような傷を負つた死体達。その見覚えのある顔に、永久は戦慄した。

「お父さん……十郎さん……」

倒れていた人間の内二人は、坂崎孝明と坂崎十郎だつた。

他の人間も、永久の見たことのある人間ばかりで、どれも坂崎神社で働いていた人達の顔だつた。しかし、誰一人として生きているようには見えない。

これが、死ぬということ。

どうしてか、初めて経験したことではないような気がした。

「どうして……こんなこと……」

ペロリと。ショートソードに付いた赤い血を刹那はなめると、永久に對して爽やかとさえ言えるような笑顔を向けた。

「私、思い出したの」

「え……？」

唐突な刹那の言葉に、永久は戸惑いの声を上げた。

「私は……思い出したわ。貴女は何も思い出さないの……？」

「何言つてるのかわかんないよ……刹那！」

「同じ、『私』なのに」

クスリと嘲笑うかのよつた笑みを永久にこぼし、刹那は左手で髪をかき上げた。

「私達はアンコミナッドクイーン……『ア』によつて生まれた無限の存在」

意味が分からぬ。

永久には、刹那の言つてゐることの意味がほんの少しもわからぬい。

それを察してか察せぬか、刹那は言葉をそのまま続けた。

「一つになるのよ。私達は……元々そうであつたように」

「わかんないよ……刹那……どうしてつ……！」

泣き出しそうになるのを必死にこらえ、永久はむせぶよつにして刹那へ叫ぶが、刹那は冷笑を浮かべるだけだった。

「貴女が……拒むなら……」

ほんの一瞬だけ、寂しげな表情を見せたが、刹那の表情はすぐに先程までの冷笑に切り替わる。

「えつ、あ……」

静かに突きつけられた切つ先は、止まることなく身体を貫いた。

鼓動の止まる、音がした。

どくん、と。最後の鼓動。

冷たい金属の刃を伝つて、最後の鼓動^{ソレ}が伝わってきたような気がして、少女は 刹那は切なげに目を細めた。

赤が足元に広がつていき、目の前で自分と同じ顔をした少女が開いた瞳孔でジツとこちらを見ている。

まるで、自分を殺したかのよう。

倒錯的なその光景に、刹那は自嘲氣味に笑みをこぼした。
ゆっくりと剣を、ショートソードを少女から……永久から引き抜いた。支えを失った永久の身体は、呆気なくその場へ仰向けに倒れていいく。

「さよなら」

小さく呟いて、刹那はショートソードを振り上げると、自分の長い黒髪を左手でまとめ ショートソードで切り裂いた。背中を覆う程に長かつた黒髪が宙を舞い、はらりと墜げに落ちていく。

そんな様子を横目に見つつ、刹那は首を覆つ程度までに短くなつた髪を左手でかきあげた。

妙な感覚だつた。

まるで、自分の身体が分解されていくかのような感覚。末端から

身体の感覚が曖昧になつてこそ、頭の中までもがボンヤリとしていく。

そして身体全体の感覚が曖昧になつてしまはうすると、徐々に身体の感覚が……今度は芯から戻つていく。

身体を一度分解されて、再構成されているかのような錯覚を覚えた。

「ん……」

小さく伸び、ピクリと指を動かして身体が動くことを確認する。寝起きのようなけだるさがあつたが、ゆっくりと身体を起こした。

「ここ……は……？」

右も左もコンクリートの壁で、自分が先程まで倒れていた場所もどりやらコンクリートらしい。左右の壁は平坦だが、地面は少し凹凸があつて道路のようだ。

周囲は薄暗かつたが、夜であるようにには感じなかつた。日の光を、建物の屋根に遮られているかのような薄暗さだ。

「路地裏……？」

直感的に、そう感じた。

「目が覚めたのね」

不意に、女性の声が聞こえた。

妖艶な印象を受ける声質で、正確な年齢は判断しにくいが「少女の声」ではない、だけはハッキリと判断出来た。

声のした方へ視線を向けると、そこには黒い女性が立つていた。地面につく程長い黒のワンピースを身に着けており、腕にはレスのあしらわれた黒い手袋をはめている。黒く長い髪はボニーーテールにしてあるが、おろせば地面についてしまつんじやないかと思える程に長く、洗うのもまとめるのも面倒だらうな、などと現状とはあまり関係ないことをボンヤリと考えてしまつ。

「ここは、世界と世界を繋ぐ境界」

そう言って女性は怪しげに微笑み、そのまま言葉を続けた。

「こりつしゃい、坂崎永久」

ひやまきよひい 桧山鏡子。 そう名乗った田の前の女は、妖艶な動作で自分の長い髪をなでた。

彼女からは怪しげな雰囲気が漂つており、その所作一つ一つが妖艶に見えてしまう。

彼女のいる場所は、この「路地裏」の行き止まりの場所で、壁を背にして鏡子は静かに永久を見つめている。後ろを振り返ると、どこに続いているのかわからない暗闇があり、何があるのか確かめてみようなどという気は一切起きなかつた。

「向こうには行かない方が良いわ。 その先は『不安定』だから」「不安定……？」

「一つの『世界』として確立していない空間よ。 グチャグチャになりたくなれば、行かない方が良いわ……」

グチャグチャ、というのが果たしてどのような状態を指すのかはわからなかつたが、行かない方が良いことだけは確かだつた。

「それで……貴女は……？」

「名前は……さつき名乗つたわね。 私はこの境界の 門^{ゲート}の管理を任されている者よ」

平凡と、鏡子は突飛なことを口にした。

無論、それを永久がすぐに理解することなど不可能で、最初に永久の頭の中に浮かんだのは疑問符だつた。

「境界……？ 門^{ゲート}……？」

わけがわからぬ、と言つた様子で問う永久に、鏡子は小さく嘆息して見せた。

「事態が呑み込めないのもわかるわ。 だけど貴女は、呑み込まなくちゃいけない」

いえ、と言葉を付け足して、鏡子は言葉を続ける。

「これから呑み込まれる、と言つた方が正しいかしら？」

何に？ と問おうとした口を、永久はすぐに閉じる。 鏡子は既に、

何かを言おうとして口を開きかけていたからだ。

「貴女達のことは、悪いけどずっとここから監視させてもらっていたわ」

「貴女達……？」

問うて、すぐにそれが自分と刹那のことだと理解する。と同時に、これまでのことが一気に脳裏を流れて行く。

倒れている人達。

飛び散った血。

笑みを浮かべる刹那。

突き刺さる 剣。

「…………つ！」

咄嗟に永久は、ショートソードの「刺さっていた」胸部に触れた。そこに痛みはなく、傷痕さえ存在しない。貫かれていたハズなのに、着ている紺色のセーラー服にも痕は存在しなかつた。

そのことにに関して永久が声を上げるよりも、鏡子が口を開く方が早く、またしても永久は言葉を飲み込んだ。

「封印が解けてからの数年間……アンリミテッドとしての記憶を失い、一つに分かれた貴女達を、私はずっと監視していたわ」

「一つに……分かれた？」

「一つになるのよ。私達は……元々そうであったようだ。」

刹那の言葉が、永久の脳裏を過る。

「アンリミテッドって……何なんですか……？」

「…………無限」

永久の問いに、鏡子は少しだけ瞼を開けた後、ゆっくりとそう答えた。

「アンリミテッド……『ア』と呼ばれるエネルギー結晶によつて生まれた限り無き者……『ア』によつて生まれた無限の存在。

存在

「アによつて生まれた無限の存在。コア。確かに刹那も、そう言つていた。

「私も、アンリミテッドに関する詳しいことはよくわかつていな

のだけど、この境界を任せられた時に『アンコミテッドは危険』ということは知らされたわ」

特に……と付け足すと同時に、鏡子の視線が永久を射抜く。

「封印が解けていた、貴女達二人は」

「私と刹那が……アンコミテッド……？」

そんなハズはない、と言いかけて、永久は唇を結んだ。

あの時の刹那も、そして死んでいるハズなのに今生きている自分自身も「アンリミテッドである」と仮定しでもしない限り説明がつかない。アンリミテッドが具体的になんのかはよくわからないが「無限」の名を冠するからには、そう簡単には死はないのだろう。だから自分は生きている、そう仮定するでしか、今は納得出来ない。夢なんじゃないかとも思った。夢であつて欲しいと。

しかしこれはどうしようもないくらいに現実で、感じているもの全てが夢のようにボンヤリなどしておらず、ハツキリと、クッキリと、感じていた。脳が、理解していた。

現実だと。

「貴女と彼女……刹那は、元々一つの存在アソシエーションだった……。だけど、封印の影響か貴女達のコアは一つに分かれて、バラバラに復活したのよ」

それを聞いて、だからソックリなのか、どうでも良さうなことを納得してしまう。

「偶然記憶を取り戻した刹那は、貴女を殺せばコアの半分が自分の元へ戻ると思ったのでしょうかね……だから貴女は、一度殺された」「私の中の……コア……？」

そつと胸に手をあてるが、そこにコアだとか言ったものがあるのかどうかなどは到底わかるハズもなかつた。

「だけど貴女の中のコアは、刹那の中に戻るどころかバラバラに砕けて散つていったわ」

「砕け散つたって……どう……？」

「世界よ」

世界？と問う永久に、鏡子はコクリと頷くと言葉を続けた。

「記憶が戻つたばかりで、力を制御し切れていなかつた刹那は、無意識の内に漏れ出した力で空間を歪めていたの。そのせいで世界と世界の境界が曖昧になつて、コアは碎け散つた時に別々の世界へと飛び散つていつてしまつたのよ」

あの時、永久が本殿へ向かう際に感じた視界の違和感。まるで陽炎のように視界が歪んでいたのは、どうやら気分のせいではないらしい。

本当に、歪んでいたのだ。

世界が一つではない。永久のこれまでの常識を覆すような事実だつたが、何故か永久は驚く素振りを見せなかつた。

悟つた、わけでもないようだが。

「貴女の中に残つているのはほんの欠片だけ。刹那は恐らく、貴女がまだ生きることにはまだ気づいていないわ。あの時貴女の中にあつたコアは、全て碎け散つて別の世界へ行つたと思い込んでいるハズよ」

「その最後の欠片を失えば私は……消える……？」

永久の言葉に、鏡子は静かに頷く。

死ぬ、ではなく、消える。直感的に永久はそう理解していた。

「貴女は今、その欠片によつて辛うじて生きている……。その欠片の力で再生した貴女を、この世界に私が連れて来たのには勿論理由があるわ」

息を吐き、鏡子は語を継ぐ。

「貴女には、碎け散つたコアの欠片探しをして欲しいの。碎けたコアの欠片は、それだけで力を持つわ。それを手にした他の世界の人間がどうなるか……薄らと想像は出来るわね？」

具体的にはよくわからない。だが、力を得た人間がどんな行動を起こすのか。それを想像するのはさほど難しいことでもなかつた。

刹那の顔が、ちらつく。

「それに、今の貴女は欠片によつて生きてはいるけど、その小さな

欠片だけじゃ、いざれ身体を維持出来なくなつて貴女は消滅してしまつわ」

その言葉に、永久は何も答えない。何か考え込むような表情を見せたまま、ずっと鏡子の方を見つめている。

「コアという他世界からの干渉は、確實にその世界の均衡を崩す。境界の管理者として、それを見過ごすことは出来ないのだけど、私はこの境界から出ることが許されない。だから……」

「私に、頼むんだね」

鏡子の言葉を続けるようにしてそう言つた永久に、鏡子は首肯する。

「ここには世界の境界。私は、貴女が欠片を探す手伝いをすることが出来るわ……。静かに消滅を待つのか、それとも自分と世界のために欠片を探す旅に出るのか」

そう言つた後、鏡子は「既に刹那は世界を渡つて欠片を探す旅に出ている」と説明した。どうやら記憶を取り戻した刹那は、鏡子の力を借りずとも自分の力で別の世界へ移動することが出来るらしい……アンリミテッドとしての、力で。

「わかんないよ」

不意にそう言つて、永久は首を左右に振つた。

「何もわかんない。何でこんなことになつてゐるのか、何で私と刹那がアンリミテッドっていう存在なのか、そもそもコアって何なのかな刹那が、そのアンリミテッドに戻つて何をしようとしているのか」

か

永久の言葉に、鏡子は切なげに目を伏せた。

「でもね、考えたところでわかんないものはわかんないし、ヒントも少ないから考えれば考える程わけわかなくなっちゃう」

これまで日常の中にいた永久には、到底理解出来るハズがなかつた。別の世界など、境界など、アンリミテッドなど、コアなど……。まるでアニメや漫画の中のような出来事の連続を、理解出来るハズがないのだ。

「鏡子さんの話を聞いてる内に、少しだけその『アンソミチッド』のこととか思い出したような気がするけど、ボンヤリしててよくわからんない。鏡子さんの話に、あんまり驚く気にはならなくなつたけどね。でも、やっぱわかんない」

そう言つて、永久はおどけるようにして肩をすくめて見せる。

「だから私は、動くよ」

スッと。まっすぐな瞳が、鏡子に向けられた。

「消えたくなんてないし、刹那のことも見つけなきゃいけない」
決意を固めた、曇りのない瞳。それを昔、どこかで見たような気がして、鏡子は少しだけ口元を緩めた。

「そう、なら協力は惜しまないわ」

鏡子がそう言つたのと、鏡子の隣の空間に大きな裂け目が出現したのはほぼ同時だった。

「ここをぐぐれば、コアの欠片を探す最初の旅が始まるわ。どうする？」

ニヤリと笑みを浮かべて問うてくる鏡子に、永久は勿論、と答えて裂け目へと視線を向けた。

「行きます」

私を、刹那を探しに。

後戻りは出来ない。否、しない。

裂け目の先に見える景色　一面の砂漠へ、永久は一步踏み出しだ。

World 1 - 1 「砂漠と芋虫」

夢を見た

不思議な夢

帰れない夢

戻れない夢

覚めない夢

瞳に映る世界

それは見慣れた世界じゃない

「何は？」？

帰して

「から、帰して

覚めない、夢

美奈

最初に視界に入ったのは、ギラギラと照りつける太陽の光だった。あまりの眩しさに思わず一度目を閉じ、顔をそむけてからもう一度目を開ける。

足元には水気のない砂が広大に広がっており、ここが砂漠である、という判断を永久が下すのには一秒もからなかつた。

「あ、あつ……」

思わず、口をついて出たのはそんな言葉だった。

永久はしばらく周囲をキヨロキヨロと見回したが、視界に入るのは砂ばかりで、特にこれと言つて特別なものは見当たらない。

「あつ……」

既に、額にはジワリと汗が滲んでいた。

それを袖で拭い、自分の着ている制服が長袖にロングスカートという、この状況下では凶悪に暑さを増幅する服装であることに気が付き、思わず溜め息を吐いた。

自慢に思つていた長い黒髪も、この状況下ではただただ暑くて邪魔にしか思えない。何か結ぶものでも持つていれば良かつたのだが、生憎永久のポケットの中にはゴムはおろかヘアピンすら入つていなかつた。

「暑い……暑いってばー！ もー！」

誰に言つてもなく声を荒げると、永久は何故か湧き上がる怒りに任せて両手をブンブンと振り回す。が、その行為のせいで更に暑さが増すことに気が付き、永久は両手をピタリと止めて頑垂れた。

「もー……暑い……」

暑いの苦手、だとかそもそも私は暑い場所で生活出来るように体が適応していない、だとかわけのわからない言い訳をボソボソと呟き、暑苦しそうに永久が髪をかき上げていると、不意に足元から声

が聞こえた。

「いつまで暑い暑い言つてるつもりなの？」

やや茶化した風なその言葉に、永久が声のした方へ視線を向けると、そこには全長十五センチ程の大きさに見える人形が立っていた。その姿は、この世界に来る前に会った女性、桧山鏡子によく似ており、多少のデフォルメはされているものの、人目で彼女だと判断出来る姿だ。どうやら喋つたのはこの人形らしく、永久を見上げて笑みを浮かべている。

「え、えっと……えつ」

困惑した様子を見せる永久に、人形はフフ、と笑みをこぼす。

「私よ、桧山鏡子。この人形は境界から私が遠隔操作してるのでよ」

「遠隔操作つて……」

「言つたでしょう。私はあそこから出られないわ。だから貴女をサポートするためにこの魔ま具を使うから、この人形も連れてつて頂戴」
鏡子の話によると、魔具というのは魔術や魔法がかけられ、特殊な力を持つた道具のことであり、今永久の目の前で鏡子として喋っている人形もその一つらしい。使用者そつくりの姿形に変化し、使用者の思い通りに遠隔操作出来る上、魔具の見ている視界を使用者へ送つてくれるらしく、鏡子はこの魔具で永久をサポートしてくれるらしい。

「へー……かわいいー」

説明を聞いて納得するやいなや、先程までの困惑した態度とは打つて変わつて、好奇心に満ちた顔で人形を拾い上げてジロジロと眺め始める。

「プチ鏡子さん……。うん、プチ鏡子さんつて呼ぶね」

人形を手の平の上に乗せたまま、一人納得したかのようにうんうんと頷く永久に、プチ鏡子はやや呆れたような様子だつたが、すぐにその表情を真剣なものへと切り替える。

「欠片がこの世界のどこにあるのは確かなハズだけど、詳しい位置まではわからないわ……。悪いけど、この広い砂漠の中を自分の

足で探しても、もうことになるわね……」

「うつわ……暑いけど頑張るしかないよね……」

ちなみにプチ鏡子の方は、共有しているのは視界だけのようだ、暑そうに汗を拭っている永久を涼しげな表情で見ている。

「でもまあ、欠片つて元々私の一部だしある程度近づいたら何かわかるかも」

「そうね。それに、欠片そのものが力を持っているから、もしこの世界に異変が起こっていればそれは高確率で欠片が原因のハズよ。この広い砂漠の中で探すのはちょっと難しいけれど、まずは異変を探してみてはどうかしら？」

プチ鏡子のその言葉に、永久は異変、ねえ……と考え込むような仕草を見せたが、やがてすぐに暑い、と呟いて手の平で頬を仰ぎ始めた。

暑そうに頬を手で仰ぎながらも、プチ鏡子を肩に乗せて永久は少しづつ歩を進める。が、見えるのは一面砂ばかりで、これと言つて景色に変化は見受けられない。五分程永久が歩いた頃には、異変どころか砂以外のものさえ見つからないこの世界は、もしかすると砂だけの世界なんぢゃないかとさえ考え始めていた。

そんな時だつた。

モソリと、足元の砂が動いた。

「つ！」

それに気が付いて、やつとか！ と言わんばかりの表情で永久は砂の中で蠢いているものへと視線を向ける。

砂の中のソレはモソモソとしばらく動き、一度ピタリと動きを止めた後、不意に勢いよく砂の中からその姿を現した。

「えつ……あ……」

砂の中から姿を現し、鎌首をもたげたソレを凝視し、永久は言葉にならない声を短く上げて硬直する。

「あら、オルゴイ・コルコイかしら」

まるで映画でも見ているかのようなテンションでそんなことをの

たまうプチ鏡子をチラリと見、永久は再び目の前のソレ……巨大芋虫へと目を向けた。

まるで柱のように太い身体の先には、凶悪な歯の並んだ円形の口がついており、それを永久の方へ向けたまま巨大芋虫は動こうとしない。芋虫の身体には数本の触手がついており、それらはウネウネと蠢いていた。

「…………！」

悲鳴を必死に呑み込んで、永久は芋虫から後ずさりするが、その足取りはどこか覚束ない。

やがてにゅるりと、巨大芋虫の触手が永久の足元へと伸びた。咄嗟に永久がそれを避けようとするよりも、触手が永久の右足に巻きつく方が早く、ハイソックスごしに永久はぬめっとした感覚を味わつた。

「ひつ」

そこでついに永久は、短いながらも悲鳴を上げた。

それに同調するかのように、目の前の巨大芋虫は奇声を上げると、巻きつけた触手で永久の身体を宙吊りにする。と、同時に永久の肩に乗っていたプチ鏡子は呆気なく地面へと落下した。

咄嗟にめぐれまいと両手で永久がスカートを前から押さえるのと、巨大芋虫の口のドアップが永久の目に映るのはほぼ同時だった。

「いやーっ！」

そこで限界がきたらしく、悲鳴を上げた後永久の意識がフツと遠のき始める。これから食べられるんじゃないか、ということよりも、目の前に巨大な芋虫がいる、という恐怖が勝つてしまつたらしく、永久が意識を手放しかけていた その時だった。

「ストップ！」

少女のものと思しき大声が聞こえ、永久は失いかけていた意識を取り戻す。その時には既に、どういうわけか永久は巨大芋虫の触手を逃れて地面へと落下していた。

触手の巻き付いていた足を見れば、どうやら触手は切断されたら

しぐ、永久の右足に巻き付いたまま切られた触手が体液を流しつつピクピクと蠢いていた。

永久と巨大芋虫の間には、両刃の大剣を握った一人の少女が立っていた。どうやら触手をその大剣で切つたらしく、大剣には巨大芋虫のものと思しき体液が付着している。

彼女の服装は、永久と同じセーラー服ではあるものの色は白で、半袖に丈の短いスカートという夏服のような涼しげな恰好だ。髪型は永久とは正反対の、明るいブラウンのショートカットで、その涼しそうな髪型が今の永久からすれば少し羨ましい。

「まだ何かする？ モンゴルさん！」

「も、モンゴルさん……？」

多分、モンゴリアンデスマーム（ゴビ砂漠周辺に生息すると言われている巨大芋虫）のことを言いたいのだろう。

モンゴルさんこと巨大芋虫は、再び奇声を上げた後、逃げるようにして砂の中へ潜つていいく。それからしばらく地面がもそもそと動いていたが、巨大芋虫は逃げたらしく、やがてそれも止まった。

「ふう……大丈夫だつた？」

「う、うん……」

セーラー服の少女は永久の方を振り向き、永久の無事を確認すると屈託なく笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0506ba/>

World × World

2012年1月12日23時53分発行